

## 続ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り(No.15)

### 「玉葱が降るときに」

・・・驚かされるものには裏がある・・・

「つれづれなるまゝに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ」、これは、ご存知のとおり、「徒然草」(吉田兼好著)の冒頭の一節である。

僭越ながら、この一節を借りて、配属先での仕事を終えて家で過ごす日々の行動を、ボラッチョ・ボニート氏風に、現在語的に描写すると、次のようになる。

「何をすればよいのか、わからないまま毎日を過ごし、ただ漫然とパソコンに向かい、ふと心に浮かんでくるとりとめもない事を、取り敢えず(続ボラッチョ・ボニートとのメキシコ便り)として、何となく書き綴ってみると、自分でもよくわからないが、何とも不可思議で、まるで自分が書いた物ではなく気が狂ったような感じだ」とでもなろう。当方は物書きでもないのに、兼好法師さんには遥かに筆は及ばないのは、仕方がない。

徒然草が書かれて、7世紀近く過ぎた現在でも、この書き出しの、硯を現在の文明の利器、パソコンに置き換えてみても私にとっては、何の違和感も感じない。

目下の当地を賑わしている話題は、経済の停滞に関する情報、麻薬戦争、さらには7月5日の下院議員選、地方選に向けた選挙戦が始まっていることである。これらについては、また別の機会に報告することもあると思うので、別の話題に目を転じよう。

雨季の季節になると、時には、突如雷とともに大粒の雹がふることもあるのに、今年のメキシコの雨季はいまのところ、雨が少ないなと感じつつ、インターネットの世界をさまよっていたら、日本各地で、雹ならぬ、「おたまじゃくし」が空から降ってきたと言うのがあった。

ここで、ボラッチョ氏得意の連想ゲームから、はたと思いついてのが、今回のタイトルに使った、「**Cuando llueven cebollas**」と言う諺というよりは、慣用句である。

これは(クアンド ジュエヴェン セボージャスと発音し、とりあえず直訳的には、(玉葱が降るときに)ということにしておこう。可能性は絶対ゼロとはいかないが、すぐには来ない、できない、従って、また後でと言う意味で、日本語の諺では、「紺屋の明後日」に相当するのだろうか。

それにしても何故玉葱かは不明だが、スペイン語の方は、将来降ってくるかどうか、分からないニュアンスが込められているが、日本は現実に、しかも各地でおたまじゃくしの落下(地上に散乱していた)が散見されたと言う。それにしても、一匹や二匹でなく、いくつもあると、「おら、びっくりこいただ！」だったに違いない。

難しい理屈をこねると、上記スペイン語諺の第2語目の時制をかえると、今度は仮定ではなくなり事実となって、それこそ本当のびっくりの、「青天の霹靂」になる(と思う)。

びっくりしたついでに、当地のビックリ(メキシコゆえカタカナ?)のひとつを紹介すると、「長さ70メートル、腰周り40メートルの巨大なズボン」が作られたという。サブタイトルに記したたように、製作した目的は、色々あるだろうが、門外漢の私には、「？」の方の吃驚(今度は漢字だ!)である。





世の中不況だ、不況だと言われ、経済活動も萎縮状態が続くなかでは、時には玉葱でも、おたまじゃくしでも降ってきたり(某国弾道ミサイルの破片では困るが)、あるいは、人がやっていない変わったことを試みるのも、時には何かの活性化のきっかけとなって、よいのではなかろうかなどと考えながら、テキーラをまた一杯と重ねたのである。

少し前までこの世の末的な騒ぎ方をされた、「新型インフルエンザ」騒動も、現在では当地では余り話題にも上ってこなくな

ったが、我が配属先のビルの入り口には、見たところ、縦3メートル、横4メートルくらいの巨大な「インフルエンザ予防」ポスターが、今でも壁面一杯に鎮座している。

専門家で無い政治家やコメンテーターがテレビに出て、勝手に喋りまくった、パフォーマンス過多の何処かの国と違って、実に簡潔で分かりやすい啓蒙活動である。

多くの画家や芸術家を輩出し、巨大な壁画が各地で見られるメキシコ。一般の生活の中まで、この感性の影響を受けているのだろうか。

徒然草にいう、「何もすることなく、過ごしていても」、こんな小さな話題を見ただけでも、世の中は変わっていることが実感される。変わらないのは当人だけで、メキシコ人は、「日頃の態度や体も大きい人が多いが、やることもでっかい」である。(2009年7月1日)



「欄外編」 大きさと再度のびっくりついでに、もうひとつ



世界貿易センタービル近くにある  
レストラン全体の壁画



メキシコ国立自治大学キャンパスに描かれている壁画  
...世界遺産登録地区